

二葉亭四迷

余が翻訳の標準

余が翻訳の標準

翻訳は如何いか様ようにすべきものか、其の標準は人に依つて、
 各おのおの異ろうから、もとより一概に云うことは出来ぬ。さ
 れば、自分は、自分が従来やって来た方法について述べ
 ることとする。

一体、欧文は唯だ読むと何でも無いが、よく味うて見
 ると、自ら一種の音調があつて、声を出して読むとよく
 抑揚が整うている。即ち音楽ミュージカル的である。だから、人が読
 むのを聞いていても中々に面白い。実際文章の意味は、

黙読した方がよく分るけれど、自分の覚束ない知識で充分に分らぬ所も、声を出して読むと面白く感ぜられる。これは確かに欧文の一特質である。

処が、日本の文章にはこの調子がない、一体にだらだらして、黙読するには差支え^{さしつか}ないが、声を出して読むと頗^{すこぶ}る単調だ。啻^{ただ}に抑揚などが明らかでないのみか、元来読み方が出来ていないのだから、声を出して読むには不適當である。

けれども、苟^{いやし}くも外国文を翻訳しようとするからは、必ずやその文調をも移さねばならぬと、これが自分

が翻訳をするについて、先ず形の上の標準とした一つであつた。

そこで、コンマやピリオドの切り方などを研究すると、早速目に着いたのは、句を重ねて同じことを云うことである。一例を挙げれば、マコーレーの文章などによくある *in spite of* の如きはそれだ。意味から云えば、二つとか、三つとか、もしくは四つとかで充分であるものを、音調の関係からもう一つ云い添えるということがある。併し意味は既に云い尽してあるし、もとより意味の違つたことを書く訳には行かぬから仕方なしに重複した余計

のことを云う。

これは語の上にもあることで、日本語の「やたらむしよう」などはその一例である、或は「強く厳しく彼を責めた」とか、或は、「優しく角立たぬように説得した」とか云う類は、屢々しばしば欧文に見る同一例である。これらは凡て文章の意味を明らかにする以外、音調の関係からして、副詞を入れたいから入れたり、二つで充分に足りてゐる形容詞をも、一つ加えて二つとしたりするのである。コンマの切り方なども、単に意味の上から切るばかりでなく、文調の関係から切る場合が少くない。

されば、外国文を翻訳する場合に、意味ばかりを考え
 て、これに重きを置くと原文をこわす虞おそれがある。須すべから
 く原文の音調を呑み込んで、それを移すようにせねばな
 らぬと、こう自分は信じたので、コンマ、ピリオドの一
 つをも濫みだりに棄てず、原文にコンマが三つ、ピリオドが
 一つあれば、訳文にも亦またピリオドが一つ、コンマが三つ
 という風にして、原文の調子を移そうとした。殊に翻訳
 を為し始はじめた頃は、語数も原文と同じくし、形をも崩すこ
 となく、偏ひとえに原文の音調を移すのを目的として、形の
 上に大変苦勞したのだが、さて実際はなかなか思うよう

に行かぬ、中にはどうしても自分の標準に合わすこと
出来ぬものもあつた。で、自分は自分の標準に依つて訳
する丈だけの手腕がないものと諦あきらめても見たが、併しそ
れは決して本意ではなかつたので、其後とても長く形の
上には、此の方針を取つておつた。

処で、出来上つた結果はどうか、自分の訳文を取つて
見ると、いや実に読みづらい、佶偈きつくつごうが聲牙だ、ぎくしゃく
して如何にとも出来栄えが悪い。従つて世間の評判も悪
い、偶々たまたま賞美して呉れた者もあつたけれど、おしなべて
非難の声が多かつた。併し、私が苦心をした結果、出来

損そこなったという心持を呑み込んで、此処が失敗している
 と指摘した者はなく、また、此処は何の位どまで成功した
 と見て呉れた者もなかった。だから、誉められても標準
 に無交渉なので嬉しくもなければ、譏そしられても見当違い
 だから、何の啓発される所もなかった。いわば、自分で
 独り角力ずもうを取っていたので、實際毀誉褒貶きよほうへん以外に超然と
 して、唯だ或る点に目を着けて苦勞をしていたのである。
 というのは、文学に対する尊敬の念が強かったので、例
 えばツルゲーネフが其の作をする時の心持は、非常に神
 聖なものであるから、これを翻訳するにも同様に神聖で

なければならぬ、就ては、一字一句と雖も、大切にせなければならぬとように信じたのである。

併ししか乍らなが、元来文章の形は自ら其の人の詩想に依つて異なるので、ツルゲーネフにはツルゲーネフの文体があり、トルストイにはトルストイの文体がある。其の他凡およそ一家をなせる者には各おのおの独特の文体がある。この事は日本でも支那でも同じことで、文体は其の人の詩想と密着の關係を有し、文調は各自に異っている。従つてこれを翻訳するに方あたつても或る一種の文体を以て何人にでも当あて嵌はめる訳には行かぬ。ツルゲーネフはツルゲーネフ、

ゴルキーはゴルキーと、各別にその詩想を会得して、厳きびしく云えば、行住座臥、心身を原作者の儘にして、忠実に其の詩想を移す位でなければならぬ。是れ実に翻訳における根本的必要条件である。

今、实例をツルゲーネフに取ってこれを云えば、彼の詩想は秋や冬の相ではない、春の相である、春も初春でもなければ中春でもない、晩春の相である、丁度桜花が爛熳らんまんと咲き乱れて、稍々やや散り初めようという所だ、遠く霞んだ中空に、美しくおぼろおぼろとした春の月が照っている晩を、両側に桜の植えられた細い長い路を辿たどるよ

うな趣おもむきがある。約言すれば、艶麗の中にどっか寂しい所のあるのが、ツルゲーネフの詩想である。そして、其の当然の結果として、彼の小説には全体に其の気が行き渡っているのだから、これを翻訳するには其の心持を失わないように、常に其の人になつて書いて行かぬと、往々にして文調にそぐわなくなる。此の際に在ては、徒らいたずらにコンマやピリオド、又は其の他の形にばかり拘泥こうでいしていてはいけない、先まず根本たる詩想をよく呑み込んで、然る後、詩形を崩さずに翻訳するようにせなければならぬ。

實際自分がツルゲーネフを翻訳する時は、力めて其の詩想を忘れず、真に自分自身其の詩想に同化してやる心算うもりであつたのだが、どうも旨く成功しなかつた。成功しなかつたとは云え、標準は矢張り其処にあつたのである。唯だ、自分が其の間に種々と考えて見ると、一体、自分の立てた標準に法のつとつて翻訳することは、必ずしも出来ぬと断言はされぬかも知れぬが、少くとも自分にとって六ヶ敷むっしいやり方であると思つた。何故というに、第一自分には日本の文章がよく書けない、日本の文章よりはロシアの文章の方がよく分るような気がする位で、

即ち原文を味い得る力はあるが、これをリプロデュースする力が伴うておらないのだ。

で、外に翻訳の方法はないものかと種々研究して見ると、ジュコーフスキー一流のやり方が面白いと思われた。ジュコーフスキーはロシアの詩人であるが、寧ろむし翻訳家として名を成している。バイロンを多く訳しているが、それが妙に巧い。尤ももつと当時のロシアは、其の社会状態が小バイロンを盛んに生んだ時代で、殊にジュコーフスキーの如きは、鉄中錚々そうそうたるものであったから、求めずしてバイロンの詩想と合致するを得て、大に成功したの

かも知れぬが、兎に角其の訳文は立派なロシア文となつてゐる。

けれども、これをバイロンの原詩と比べて見ると、其の云い方が大變違ふ、原文の仄起そつきを平起としたり、平起を仄起としたり、原文の韻のあるのを無韻にしたり、或は原文にない形容詞や副詞を附けて、勝手に剪裁せんさいしてゐる。即ち多くは原文を全く崩して、自分勝手の詩形とし、唯だ意味だけを訳してゐる。兎が其の両者を読み比べて見るとどうであらう。英文は元来自分には少しおかつたるい方だから、余り大口を利く訳には行かぬが、兎に角

原詩よりも訳の方が、趣味も詩想もよく分る、原文では十遍読んでも分らぬのが、訳の方では一度で種々の美所が分つて来る、しかも其のイムプレッションを考えて見ると、如何にもバイロンのだ。即ちこれを要するに、覚束ない英語でバイロンを味うよりは、ジュコーフスキーの訳を読む方が労少くして得る所が多いのである。

其処で自分は考えた、翻訳はこうせねば成功せまい、自分のやり方では、形に拘泥するの結果、筆力が形に縛られるから、読みづらく窮屈になる。これは宜よろしくジュコーフスキーの如く、形は全く別にして、唯だ原作に含

まれたる詩想を發揮する方がよい。ところは思つたものの、さて自分は臆病だ、そんならと云うてこれを決行することが出来なかつた。何故かと云うに、ジュコーフスキ一流にやるには、自分に充分の筆力があつて、よしや原詩を崩しても、その詩想に新詩形を附することが出来なくてはならぬのだが、自分には、この筆力が覺束ないと思われたからだ。従来やり來つた翻訳法で見ると、よし成功はしない乍らも、形は原文に捉つてゐるのだから、非常にやり損うことがない。けれども、ジュコーフスキ一流にやると、成功すれば光彩燦然たる者であるが、も

し失敗したが最後、これほど見じめなものはないのだから、余程自分の手腕を信ずる念がないとやりきれぬ。自分にはさすがにそれほど大胆ではなかつたので、どうも陰^{けん}呑^{のん}に思われて断行し得なかつた。で、依然旧翻訳法でやっていたが、……

併しそれは以前自分が真面目な頭で、翻訳に従事した頃のことである、近頃のは、いやもうお話しにならない。

(明治三十九年十月)

日本文学電子図書館

余が翻訳の標準

著 者：二葉亭四迷

制作者：宮澤一郎

底 本：現代日本文学大系 1

「政治小説・坪内逍遥・二葉亭四迷集」

筑摩書房

昭和46年2月5日 初版第一刷発行

日本文学電子図書館